

△論
說▽

心理的幸福主義の妥当性 (四)

目次

序言

第一章 幸福の概念

第一節 思想史的省察（以上第二巻四号）

第二節 言語的事実（第三巻一号）

第三節 導出（第三巻二号）

第二章 心理的幸福主義

第一節 必然的帰結（本号）

第二節 弁証

第三節 心理的幸福主義者

平
尾
透

第二章 心理的幸福主義

第一節 必然的帰結

前章において、我々は合理的な推論の末に幸福の普遍妥当的な概念を得ることができた。そのような作業から出発したのは、始めに述べたように、そもそも幸福の概念内容が明確でなければ、人間の心理及び行動と幸福との関りを究明しえず、従って、心理的幸福主義の理論もしくは思想について適切に考察することができないからである。幸福の概念規定は、心理的幸福主義の問題を検討する上で不可欠の前提なのである。ともあれ、そのような課題は既に遂行され、「幸福とは自己自身の内面に関する何らかの欲求の充足された状態である」という結論が、導き出された。そこで、いよいよ本章からは、そうした概念規定に基づいて心理的幸福主義そのものの問題に入っていかなければならない。即ち、本稿の根本テーマである、その妥当性の如何についてである。それはどのようにして判断されるのであるか。そして、その正確な意味とは何であろうか。このような問いに答えるためには、何処からアプローチしていけばよいのであろうか。

既述の如く、心理的幸福主義とは人間行動の動機（又は、力学的見地からする用語を用うれば、動因）に関する学説である。そしてそれは、その動機の少なくとも根底に常に自己幸福というものが存在しているとする。従って、心理的幸福主義について判断するためには、当然動機の内容や在り方について考察しなければならない。しかも、その普遍的性質を問題にしている以上、網羅的且つ詳細に検討しなければならない。しかし、それは極めて困難な課題である。

何故なら、人間の持つ諸々の動機の内容や在り方は全く種々様々だからである。それに關していくつか具体的に述べれば、まず、動機は単一的に機能するだけではなく、というよりむしろしばしば、重層的であつたり複合的或は（逆に）排反的であつたりする。例えば、或る一つの倫理的行為が愛と利己心と義務感という三つの動機からなされることもある。また動機は、人により或は時と場合により対照的な内容をもちうる。例えば、利己的と利他的、合理的と非合理的というようにである。更には、動機の成立の仕方にも違いが見られる。例えば、自覺的な場合や熟慮に基づく場合もあれば、無意識的な場合や衝動的・反射的な場合もある。要するに、動機の内容や在り方は、まさに人間行動の全面的な多様性に現れているように千差万別なのであり、且つまた、その一つ一つがそれぞれ複雑な構造をなしているのである。

それでは、我々はどうすればよいのであろうか。動機について具体的に検討しえないとなれば、それと幸福との關係、即ち、動機の中に幸福への志向が常に存在しているか否か、或は潜んでいるか否かということを、どのようにして判断しうるのであろうか。ここで、先に幸福の概念規定において用いた手法が役に立つであらう。ここでは、具体的幸福内容の無限の多様性からして内容的レベルでの総括が困難であるが故に、あらゆる幸福に共通する形式的なるものに注目したのであった。ここでも事情は同じである。つまり、具体的な動機内容の多様性の故に、動機における形式的なるものを探求してみるのである。その結果、もしそのようなものが見出されたとするならば、その形式性の故に、それはあらゆる動機内容を貫く普遍的・絶対的なものと推定してよいであらう。そして問題は、そのようなものが幸福と結びついているか否かということである。もしそこに必然的な連関が認められるならば、それによって、動機における幸福の普遍的存在が証明されたことになるであらう。従つて、ここでまず考察すべきは、動機において形式的なるものが存在しているかどうかということである。諸々の行為（本稿では「行動」と同義に扱う）の諸々の動機

を考えてみて、そこに形式的なるものを果して発見しうるであろうか。

形式的なるものを見出すためには、幸福概念の場合と同じように、動機一般について理論的に考察してみなければならぬ。そこでまず、動機というものの概観を得る必要上、動機とはそもそも何かという問いから出発すべきであろう。動機とは、主体の側にあつて行為を生み出す心理的な原因或は原動力となるものである。そしてそれは、人間は心理的な存在であるから、最も根本的な原因であると共に普遍的な原因でもある。何らかの動機があつて初めて或る行為がなされるのであつて、動機なき行為はありえない。たとえ無意識的な行為や半ば反射的な行為であつても、それが一つの行為と見なしうる限り、動機は究極的又は客観的には常に存在しているのである。そのような場合、行為の直接的又は表面的な目的は確かに動機ではない。しかしその背後には、そのような目的と何らかの意味で結合した或る動機が必ず潜んでいるのである。行為主体としての人間心理の構造は立体的であつて、動機の位置は一定ではない。浅くて行為とストレートに結びつく場合もあろうし、深層にあって屈折している場合もあろう。いずれにせよ、少なくとも根底には、常に何らかの動機が行為の原因として存在しているのである。

このように、動機とは行為の原因、行為主体の側の心理的な原因であると言えるが、それでは、その、行為の原因とは何であらうか。行為を生み出す主体的・心理的な働きとは、より具体的に何を意味するのであらうか。それは言うまでもなく欲求であり、或はまた意志であらう。欲求の力や意志の力が人間をして行為へと駆り立てるのであり、常にそれらが行為の原因となるのである。しかもそれらは、行為に結びつく限り、決定的・最終的な原因である。あらゆる行為が何らかの主体のそれであり、且つ行為主体が心理的な存在である以上、それは当然であらう。如何に外的諸条件に規定されようと、鍵を握っているのは欲求や意志なのである。そして、前述の如く、目下の目的は動機における形式的なるものの発見にあるが、具体的内容をもたない欲求そのものや意志そのものは確かに形式的な概念

である。従つて、それらは動機そのものと本質的な関りがあると推定されるであらう。つまり、動機と欲求や意志とはむしろ別の概念であるが、両者は行為の原因という見地から、或はそのような觀念を媒介として、結びつくのである、しかもおそらく本質的な仕方で結びつくと思われるのである。しかし、果してそうであらうか。動機の考察を欲求や意志のそれによって本當に行なうことができるのであらうか。そしてまた、一応區別せられた欲求と意志とは、どのような関係にあるのであらうか。

そこでまず欲求についてであるが、それが行為の最も基本的な原因であることは、疑いない。諸々の欲求には、生理的なものや本能的なものから高度に精神的なものに至るまで、段階的な相違があり、また本人による自覺の程度も様々であるが、我々はあらゆる行為について何らかの欲求の存在を認めることができる。もちろん、欲求の実際の在り方は複雑である。それと行為との関係は單純ではないし、両者の間の具體的な対応の構造は必ずしも明確ではない。仮に一対一の明らかな対応が成立しているとしても、欲求は通常でさえ同時に二つ以上存在する。そして、それらが一つの行為において統合されうる場合には、問題はないが、それらはしばしば対立する。しかし、そのような諸欲求の対立において、それらが原因としての効力を失ったり、そこに別の要素が介入してきたりするわけではない。対立情況はあくまで欲求自体の論理によって整理され解決される。欲求自体の論理とは、言うまでもなく欲求の強さである。即ち、より強い欲求が常に勝利を収めるのであり、それが最終的に行為と結びつくのである。或る行為がなされたということは、それに対する欲求が他の如何なる欲求よりも強かったということなのである。そのようにして、欲求は行為を生み出す。そして少なくとも、如何なる行為の背後にも、それへの欲求が常に存在しているのである。

次に意志についてであるが、欲求と共に意志もまた確かに有力な行動原因である。意志的な行為は数多い。そしてなるほど、一見したところ、意志は欲求とは異なった仕方で作作用するように感じられる。特に、或る欲求の存在にも

かわらず、それとは別の行動が敢えてなされるとき、そこに意志の力が働いているような印象を受ける。しかし、その意志の中に欲求はないのであろうか。果して、意志と欲求とは根本的に違うものなのであろうか。

一般に、両者はその起源を異にし、それぞれ別の機能をもっているように見られている。大雑把に言って、欲求は自然的・衝動的、意志は自覚的・反省的であり、後者が前者を統制するというように考えられている。だが、実はそうではない。欲求と意志とは互に異質的なものではない。それどころか、意志の根は実際には欲求にあり、意志自体が一つの欲求に依拠しているのである。何故なら、第一に、意志とは欲求が作用するその仕方についての概念であり、欲求の一つの在り方にすぎないからである。即ち、意識化された欲求が何らかの目的観念を媒介として作用する場合に、そのような欲求又はその源泉を我々は意志と呼んでいるのである。それは欲求の自覚的・合目的な作用形態に他ならない。また第二に、意志の基礎となり意志を發動する主体となるもの、従ってまた、行為に関する目的観念を様々に形成するものは、人格であるが、その人格とは（情意的側面に関しては）種々の欲求から成り立っているからである。いろいろな欲求が各個人それぞれの仕方で定型的に位置づけられ、一つの統一的な全体となったもの、つまりそれぞれ個性的な統一的欲求体系が、まさに人格なのである。人格の相違は欲求の質とその配置の仕方によってもたらされる。むろん、それらもまた何らかの総合的な欲求によって決定されざるをえないが、そのような循環（フィードバック）によって序々に人格が形成されていくのである。人格がそのようなものである以上、その人格に依拠する意志もまた一つの再構成された欲求であるということになる。意志とは、人格という欲求体系に根ざす一つの欲求に他ならない。そしてそうであるならば、即ち、意志が本質的に一つの欲求であるならば、前述した欲求のほうの分析と合わせて、結局、行為は全て何らかの欲求によって惹き起こされるということになるであらう。欲求が究極的には唯一の主体的・心理的な行動原因なのである。

もちろん、先に言及したように、なるほど或る種の行為は、欲求の故にではなくしば欲求にもかかわらずなされる。特に、倫理的行為などは一般に自己の欲求を抑制したり否定したりすることによって遂行されるように思われる。つまり、倫理は、理性に基づく自覚的・反省的な意志が自然的・衝動的な欲求を克服して可能になるのであり、従ってそこには、意志とは欲求なりという既述の断定にもかかわらず、やはり欲求とは別の意志というものが働いているのではないか、と思われるのである。しかしながら、そのような行為にあっても、抑制され否定されるのは、決して全ての欲求ではない。意志によってあらゆる欲求が克服され、それによって如何なる欲求も消え去ってしまうというわけではない。確かに、或る一つの又はいくつかの欲求は抑えられるが、その際、人格に根ざす何らか別の欲求がそれと引き換えに作用しているのであり、なればこそ当該欲求の抑制が可能になるのである。即ち、倫理的行為においても、それを生み出すヨリ強い欲求が必ず存在しているのである。そして、それが意志となって現れる。つまり、もし倫理的な意志が反倫理的な欲求を抑制しえたとすれば、それはその意志の背後にヨリ強い（単純又は複合的な）欲求が存在しているからに他ならない。行為を決定づけるのは欲求の強弱であり、意志とは言い換えれば、意識的行為に関する最も強い欲求、勝利した欲求なのである。

このように、意志は、欲求とは異質の機能であるように見えるが、実は根本的に欲求に由来するものであること、従って、欲求が行為の普遍的原因であることが、判明した。人間のあらゆる行為は何らかの欲求に基づいているのである。そうであるならば、そのような結論を先の動機の問題と結びつけることができるであろう。動機とはまさに行為の原因であった。従って、欲求があらゆる人間行動の原因であるならば、ここにおいて動機と欲求とは結合するのである。我々は動機における形式的なるもの、それ故また普遍的なるものを求めて、欲求を見出した。そしてその欲求というのは、具体的な欲求内容と区別された欲求そのものは、確かに形式的であり、また今見たように、行為の

原因として普遍である。従って、欲求は動機における普遍的な要素であると言うことができよう。動機は常に何らかの欲求に依拠しているのであり、かくて、動機についての考察は欲求に焦点を合わせればよいということになる。つまりここに、動機という問題対象、行為の原因ということの殆ど単なる言い換えにすぎない無内容なそれが、欲求という実質的な対象によって置き換えられたのである。動機の問題は欲求のそれに等しいのである。

それでは、そのように設定された欲求という対象について、どのように考察すればよいのであろうか。具体的に考察しえないことは、この場合も変わりがない。欲求もまた、その具体的な内容や在り方は極めて多様だからである。それ故、我々は欲求一般について問題にする以外にはない。即ち、それについて理論的に考えてみるのである。そして、その際の観点はむしろ幸福との関りにある。動機における幸福の存在如何がここでのテーマだからである。欲求と幸福との関り、つまり、欲求が幸福と普遍的に結びついているか否か、その間に必然的な連関があるかどうかということが、問題なのである。

そこで、その考察の方法であるが、それについては、第一章において規定された幸福の概念が役に立つであらう。その概念規定とは、「幸福とは自己の内面に関する何らかの欲求の充足された状態である」というものであった。そうであるならば、即ち、そのように幸福が欲求充足に等しいのであるならば、欲求における幸福目的の普遍性は明白であらう。何故なら、あらゆる欲求は常に必然的にその充足をめざすものだからである。或は、欲求と充足とは言わば論理的に不可分の関係にあるからである。しかしながら、当該規定は幸福と欲求充足とを完全に等置しているわけではない。そこには一つの限定条件が付されている。つまりその条件とは、幸福をもたらすのは、単なる欲求充足ではなく「自己の内面に関する」それだということである。そうした類の欲求の充足によってのみ幸福が生ずるというのである。かくして、我々はその点に注目しなければならない。そうした限定条件が欲求と幸福の関係のキー・ポイントである。

ントなのである。もし我々が自己の内面以外のものを欲求の対象となしうるならば、欲求の目的は必ずしも幸福ではないということになってしまうであろう。何故なら、自己の内面に関する欲求以外の欲求があるということは、幸福に対する欲求以外の欲求があるということであり、従って、我々は常に幸福を求めているわけではないということになるからである。それ故、もし欲求の目的が常に幸福にあるとするならば、我々は少なくとも究極的に自己の内面しか欲求の対象となしえないということでなければならぬ。逆に言えば、我々の欲求対象が常に自己の内面に限定されざるをえないということが明らかになって初めて、幸福目的の普遍性が導出されるのである。だが、それは事実であろうか。我々は本当に自己の内面についてしか欲しえないのであろうか。この問題を以下考察してみなければならない。

とはいえ、そのような問題は人間存在の根本に関する問題である。従って、それは存在論上の基本問題と結びついていのように、それ故、その結論を出すことは容易でないというように、感じられるかもしれない。なるほど、人間存在の根本をトータルに捉え、一定の存在論を構築することは、著しく困難な課題である。しかし、欲求対象の問題の考察にとってそのような試みは必要ではないし、我々は(例えば)実在論や心身論といった諸々の伝統的な論争に関与するには及ばない。反対に、その問題は非常に明白な経験に関する。即ち、その問題の判断は直接的な観察や直観的な内省に基づいて容易になされうるのである。そこで、判断の基礎となるそのような経験内容についてであるが、次の二つ(又はそれらの連関の故に一つ)が考えられるであろう。それらは人間存在に関して極めて明白と思われる或る根本的な事実である。

まず、人間の絶対的な個別性という事実が指摘されうる。人間はそれぞれ一個の生命として(肉体的にはむしろのこと)感覚的・精神的に全く別の存在である。即ち、あらゆる自己意識は唯一無二の存在なのである。一人で生まれ一人で

死んでいくということが象徴しているように、各人はその意味で究極的に孤独であり、自己と他人とは決して一体となることができない。自他の間には、どんなに豊かな想像力をもってしても、如何に広大無辺な精神をもってしても、埋め尽くすことのできない絶対的な断絶がある。自己は永久に且つ完全に自己自身でしかありえず、自己から逃れ出することは原理的に不可能なのである。これは、およそ生命或は生物というもののものつ物理的な必然性と言うことができる。このような絶対的個性の事実は今く自明であり、これ以上の説明を要しないであらう。

もう一つは、といっても第一点と関連しているが、人間の絶対的な主観性という事実である。人間が人間として生きるということは、少なくとも意識をもつことであるが、その意識とは常に自己のそれである。人間は自己の意識の中だけで一生をすごす。即ち、人間は言わば徹底的に意識、存在、だということである。従って、人間にとって「存在する」とは、「意識する」ことに等しい。というより、存在とは意識でしかありえない。つまり、人間にとつてはあらゆるものが自己の意識においてしか存在しえないし、自己自身ですら自己意識としてのみ存在しうる。人間は死に至るまで自己の意識から絶対に離脱することができないうと同時に、その自己の意識が究極的には唯一の世界なのである。

例えば、外なる物質的世界は、自己自身の肉体も含めて、自己の意識と無関係に或はそれから独立して、存在している。それが真に実在しているか否かはともかくとして、それは確かに意識に依拠することなくそれ自体として存在している。このことは、多数の意識による共通の認識という事実が証明している。このように、自己の意識から区別された物質界の存在は客観的な事実であるが、しかし同時に、それは各人にとっては彼自身の意識の中においてしか存在しえない。人間にとっては、客観的な存在も究極的には主観的な存在でしかない。何故なら、我々は物質の存在を自己自身の感覚器官によってしか、従って、その器官又は(その統一的な中枢たる)意識の内部における印象という形

においてしか、認識することができないからである。その意味で、物質界の存在は意識に依存しているのであり、意識がなければ物質界は事実上（即ち人間にとっては）存在しないと言うことができる。そして、そのような事態は当然あらゆる人間について当てはまるのである。つまり、それぞれがそれぞれ独自の意識世界、従って存在世界を構築しており、それらは決して重なり合うことがない。各人はそうした完全に孤立的・閉鎖的な世界の中で常に生活する以外にはないのである。

同様のことは、例えばまた、共感や同情といった現象についても言える。それらは意識内存在という人間の限界を突破しているように見えるかもしれない。自己が他人へと同化し、両者が精神的に十分一体化しているように思われるかもしれない。しかし、それは全く表面的な観察である。存在が自己の意識に依存しているという事態は、精神的な対象についてはなおのこと変わりがない。従って、如何に強烈な共感であれ、如何に完全な同情であれ、決して自己自身の意識の枠から出ることはできないのである。どれほど他人の立場に身を置き、どれほど他人になりきろうとも、共感や同情はやはり自分のものでしかない。即ち、究極的には常に自己自身の喜びであり、自己自身の悲しみに他ならない。それらは、自己が他人であると想像した場合の、あくまで自己の感情なのである。しかも、それらの感情が強ければ強いほど、他人と一体化するどころか、逆にいつそう自我的性格が強まるのである。偉大な聖者の純粹無私なる共感といえども、どこまでも彼自身の感情にすぎない。無垢な少女の同情の涙も、やはりその子自身の感情が生み出すのである。それらは決して他人の感情そのものではない。彼らは他人の心の中に本当に入ることとはできない。苦しむ人を見て彼らが憐むとき、それが如何に真実に溢れていようと、他ならぬ彼ら自身が悲しいのである。

このように、意識内存在という意味において人間の絶対的な主観性の事実が指摘されうる。人間にとって、究極的には自己の意識が全ての世界なのである。但しそれは、既に一言しておいたように、実在性の問題について、またそ

の他の存在論的又は認識論的な問題について、論及しようとするものではない。即ちそれは、存在論的・認識論的に或る特定の立場を主張しようとしているわけではないのである。人間の絶対的主観性ということは幾多の経験的事実に立脚しており、明晰判明な一つの前提と言うべきである。しかも、それは意識と外界それ自体ではなくその關係を論じているにすぎない。従って、その議論は、意識と外界の実在性が如何にあらうと成立しうるものであり、その妥当性はどのような立場も認めざるをえないであらう。

それはともかく、前述のように、人間存在に関する二つの根本的事実が明らかにされた。即ち、絶対的な個別性の事実と絶対的な主観性の事実である。そして、それらは元来、欲求対象の問題に発していた。つまり、欲求の対象が自己の内面に限定されるか否かという問いに答えんとして、人間の在り方を探求した結果、認識されたものであった。そこで、当然次に論ずべきは、それらの事実と元々の問いとの関りである。新たに見出された二つの事実は、先の検討課題にとってどのような意味をもっているであらうか。それらは人間の欲求対象の問題について何を物語っているのであろうか。

しかし、それはもはや明らかであらう。人間が絶対的に個別的且つ意識内的な存在であるならば、そのような人間のもつ欲求の対象が何処に存在するか、或は何処に存在することが可能であるかは、言うまでもあるまい。それはもちろん自己の内面である。自己の内面のみである。人間が絶対的に自己自身でしかありえず、しかも自己の意識の世界においてしか生きることができない以上、このことは必然的であらう。人間にとって、自己自身の個別的な意識以外の如何なるものも存在しえないとすれば、存在しないものを対象とすることはできないが故に、対象は内面に限定されざるをえないのである。かくして、人間は究極的には自己の内面的状態についてしか欲求することができないと、言うことができる。従ってまた、自己における何らかの内面的状態と結合しない限り、如何なるものも欲求されえない

いということになる。それは、一個の生命並びに意識という人間存在そのものの根源的性質からくる絶対的な制約なのである。

なるほど、人間は自己の内面的状態以外の様々なものを欲求しうるように見える。というより、欲求の多くがそうであるように見える。しかし、それは現象的な事実にすぎない。それらの外的な欲求対象は実は直接的又は手段的なものであって、その背後或は根底には、それによって充足される内面的な欲求が必ず存在しているのである。つまり、前者の欲求は、それに対応する後者の欲求に常に依拠しているのである。内面的状態以外の対象に対する（言わば）外的欲求が、ただそれだけで生み出されることはありえない。外的欲求は（言わば）内的欲求と結合することによって初めて生ずるのである。確かに、内的欲求の種類は限られており、従って、もしあらゆる欲求が究極的に内的なものであるとするならば、それは無限定な人間行動の事実と矛盾するように思われるかもしれない。しかし、一つ一つの内的欲求は、それぞれ回りの情況や環境に媒介されて種々様々の外的欲求を創出し、或はそれらへと転化する。そしてそれによって、多様な人間行動が可能となるのである。人間行動が極めて多種多様であるのは、それを惹き起こす同様に多種多様な外的欲求が存在しているからであるが、そもそもそれらは比較的少数且つ単純な内的欲求に由来しているものであり、欲求のそのような多様化・複雑化をもたらす基本的な契機が、情況や環境なのである。

このように、外的欲求は常に内的欲求に裏打ちされており、人間のもつあらゆる欲求は本質的に内的欲求である。そうであるならば、従って、人間は究極的に自己の内面についてしか欲求しえないということであるならば、予め提示しておいた論理からして、その結論は明白であろう。即ち先に、心理的幸福主義の証明のためには欲求対象の内面性ということが示されなければならないとしたが、ここにそれが果されたのである。人間が自己の内面についてしか欲求しえないということは、欲求の目的が常に自己の幸福にあるということの意味しているのであり、それによって、

我々は心理的幸福主義へと大きく近づくのである。それでは、その論証は如何にして完成されうるであろうか。心理的幸福主義の妥当性の判定は、最終的にどのような論理によって下されるのであろうか。

我々はこれまで、そのような論理を構築するための準備を重ねてきた。それは大別して二つの段階から成っている。まず第一章においては、幸福の概念規定を行なった。そして、この第二章の第一節においては、始めに人間行動の根源を探索して、欲求が普遍的な原因を成していることを見出し、次いで、人間存在の根本的事実から、欲求可能な対象が絶対的な限界をもっていることを認識した。かくして我々は、ここに至って、本稿の主題に関する三つの重要な命題を確立したことになる。それらはそれぞれ「幸福」と「行為」と「欲求」についての根本命題であり、次のようにまとめることができるであろう。

(A) 「幸福」 「幸福とは、自己の内面に関する何らかの欲求の充足された状態である。」

(B) 「行為」 「人間の行為は全て何らかの欲求に依拠している。」

(C) 「欲求」 「人間は究極的に自己の内面についてのみ欲求することができる。」

こうして、心理的幸福主義の妥当性を判断するために必要と思われる三つの命題が措定されたが、それらは全体として何を物語っているであろうか。そこから何が導き出されるのであろうか。三つの命題を見て直ちに気づくことは、C（欲求命題）のみならず A（幸福命題）と B（行為命題）にも「欲求」の概念が含まれていることである。従って、このことから当然予想されることは、幸福と行為の関係は欲求によって決まってくるのではないかということである。つまり、その可能性を探るべき二つの概念の結合、即ち問題の、幸福と行為の結合は、欲求を媒介としてなされるのではないかということである。それでは、それらは如何に結合するのであろうか。

或る対象への欲求とは、即ちその欲求の充足に対する欲求に他ならない。そもそも欲求とはその充足をめざすもの

だからである。そこでまず、A（幸福命題）とC（欲求命題）から、「人間は究極的に自己の幸福だけを欲求することが出来る」ということが、引き出される。そしてそうであるならば、更に、それとB（行為命題）から、「人間のあらゆる行為は究極的に自己幸福への欲求に依拠している」ということが、導き出されるであらう。その命題、換言すれば、「人間は究極的に自己の幸福を常に求めている」ということ、或は「人間のあらゆる行為の究極的動機は自己の幸福にある」ということ、まさにこれが三つの根本命題からの必然的な帰結である。従ってまたそれが、これまでの考察に基づく最終的な結論なのである。その結論が心理的幸福主義を指し示していることは、言うまでもない。即ちここに、心理的幸福主義の妥当性に関してようやく一つの判断が下されたのである。

以上のように、心理的幸福主義は妥当するというのが、本稿の（未だ完結してはいないが）結論である。「序言」で触れた如く、従来否定的な見方が支配的であったが、端的に言えば、それは誤っていたのである。もちろん、これまで述べてきたように、本稿で言う心理的幸福主義とは根源的なレベルにおけるそれであり（と言っても、その幸福はむしろ真正正銘のそれであるが）、卑近な利己主義や直接的な快樂主義を（当然、それらも個人により可能性としては含みうるが）意味するわけではない。確かに、我々は他人の幸福を始め自己幸福以外のものを求めうるが、それは直接的にであって、そこにおいても究極的には心理的幸福主義が貫徹しているのである。

ともあれ、そのような意味における心理的幸福主義の理論によれば、あらゆる人間はいつ如何なる場合にも少なくとも究極的には自己自身の幸福を求めているのであり、しかも、可能と思われる最大限の自己幸福を求めているのである。或は、より適切な言い方をするならば、主観的な意識の如何や自覚の有無にかかわらず、絶対的・不可避的に求めざるをえないのである。既述の如く、人間のあらゆる行為は自己の内面についての何らかの欲求に基づいているからであり、且つまた、より強い欲求が常に行為を選択するからである。そしてそうした心理的幸福主義は、献身的

な奉仕や自己犠牲のように、自己の幸福を放棄するやに見える行為においても妥当する。そのような行為もまた、それによる内的な充足を動機として初めて可能になるからであり、それを求める何らかの欲求が必ず存在しているからである。かくして、人間は意識するとせざるにかかわらず一瞬一瞬あれかこれかの決断をしているが、常にそのつど最大の自己幸福のための選択をせざるをえない。それは人間が人間として生きている限り従うほかない、というより、生きているということが即ち従っていることになる、普遍的法則である。つまり、人間が一個の生命として、それ故、一つの個別的な欲求体系（人格）として、存在している限り、単にそれだけで必然的に妥当する鉄則なのである。

但し、そのように断言してしまうのは、些か早すぎるかもしれない。基本的な論証は既に終了しているとはいえ、心理的幸福主義の妥当性については、言及すべきことがまだいくつか残されているからである。しかし、これまで展開してきた論理からして、既述の意味における心理的幸福主義の普遍的確立は明らかであろう。少なくとも、あらゆる人間行動の根底には或る共通の根本的な動機があること、そしてそれが自己幸福的なものであることは、確実なのである。